植村泰夫著
世界恐慌とジャワ農村社會

宮本謙介

はじめに

本書は、世界恐慌期ジャワ農村の社會經濟構造の變化について、東部ジャワのスラバヤ地方とブスキ地方を事例とする詳細な分析であり、極めて實證度の高い研究成果である。著者は、これまでにも主に世紀轉換期を對象として、スラバヤ、ブスキの地方農村分析をはじめ、當該期ジャワの土地制度、村落首長論、農民運動論など、幅廣い研究を積み重ねられており、今回はその蓄積の上に世界恐慌期の東部ジャワ農村研究を纏められたものである。近年の植民地期インドネシア社會經濟史研究では、日本での研究は乏しいものの、諸外國では一九世紀ジャワの強制栽培期を中心に著しい研究の前進が認められる。それでも二〇世紀前半期の研究は相對的に遅れており、管見の限りでは本書のような恐慌期ジャワ農村に關する本格的な研究は、國際的にも他に例を見ないように思われる。主に利用されている一次史料は、オランダ國立文書館、レイデン國立民族學研究所などが所藏する舊植民省關係の未公刊史料であり、史料の點でも國際的な研究水準に達していると言ってよい。

本書の構成は以下のようであるが、この書評では、Ⅰ課題設定と恐慌期ジャワ農村（序・第一章）、Ⅱスラバヤ農村研究（第二章～第四章）、Ⅲブスキ農村研究（第五章～第八章）に區分し、各々の要點に論評を加えるとともに、最後に全體にかかわる問題點を提示してみたい。

序　本書の課題と方法
第一章　世界恐慌下のジャワ
第二章　世界恐慌とスラバヤ糖業
第三章　世界恐慌とスラバヤ住民農業
第四章　世界恐慌とスラバヤ農民經濟
第五章　世界恐慌とブスキ糖業
第六章　世界恐慌とブスキ煙草栽培
第七章　世界恐慌とブスキ住民農業
第八章　世界恐慌とブスキ農民經濟
終　章　世界恐慌とジャワ農村社會

Ⅰ　課題設定と恐慌期ジャワ農村の概要

一九世紀以降のインドネシアは、オランダ植民地支配の深化とともに、コーヒー、甘蔗などの熱帶農產物生產に特化したモノカルチュア型經濟構造を強いられ、さらに世紀轉換期には、不足する食糧（主に米）を東南アジア大陸部の三大デルタから輸入するという、東南アジア植民地閉分業體制に組み込まれて、熱帶農產物市場と食糧市場の雙方の動向に大きく左右される構造的脆弱性を持つことになった。著者によれば、「一九三〇年代の世界恐慌は、世界的な農產物價格の暴落を通して、ジャワの農民經濟に內在するこうした矛

盾を一擧に顯在化させた」（二頁）のであり、この時期にジャワの社會經濟構造が如何なる變化をみせたかが、本書のテーマであると言われる。

序では、まず先行研究としてオマリー（W. J. O'Malley）とエルソン（R. E. Elson）の業績が批判的に檢討されている。オマリーの學位論文（一九七七年）は、恐慌期に農外産業を含む産業構造の變化を指摘した點で貴重であるが、肝心の村落社會の變化の檢討が見られないと批判される。一方、エルソンの研究（一九八四年）は、農民層分解論の視點から恐慌期ジャワ農村を論じており、大土地所有者と貧農の沒落、中農＝自作農の相對的安定を強調する、いわゆる中農平準化説であるが、史料分析においても分解の論理からしても説得的ではないと言われる。

これらの批判點については評者も首肯できるが、ただし次の點には留意すべきであろう。つまり、オマリーの學位論文は、ジョクジャカルタと東部スマトラ（煙草プランテーション地帶）の比較研究がテーマであり、分析は恐慌期の政治論にまでおよんでいる。またエルソンの研究は、パスルアン（東部ジャワ）農村を事例とする長期（一八三〇年～一九四〇年）の農村變動を課題としている。從って、著者のように恐慌期ジャワ農村の分析部分のみを切り離して批判するのでは、これらの著作の評價を不當に押し下げることにならないか、という危惧を感じる。それぞれのテーマに即した評價も示しておくべきであろう。

先行研究の批判的檢討を踏まえて、著者が重視する檢討課題は、「一九三〇年代の世界恐慌の下で世界市場向け輸出作物栽培と住民農業がどのような影響を被り、その結果、農民經濟がどのように變化したか、そしてそのことにより農村社會經濟構造がどう變化したのか」（七頁）という點であり、本書ではこの課題に東部ジャワのスラバヤ地方とブスキ地方の事例分析によって應えようとしている。

スラバヤとブスキの兩地方は、本書でも指摘されているように、ともに典型的な輸出向けプランテーション地帶であるが、土地占有形態や人口・耕地狀況は對照的である。ジャワ特有の土地占有形態と農民層分解の關連は、以前から重要な研究テーマとして取り上げられてきた。評者もこの點に關心をもっており、注目してみたい論點である。スラバヤでは定期割替の共同的占有が優勢であるが、ブスキは世襲的な個人的占有が支配的な地方として知られている。また、恐慌期のスラバヤは、開發がほぼ限界に達した人口稠密地方であるが、ブスキは人口希薄で勞働力が不足するフロンティアであり、この相違も農村の變化を規定する要因であろう。

第一章は、世界市場とジャワ農村との關係の概觀に當てられているが、分析の中心は最大の輸出向け産業であった糖業の恐慌期の動向と住民農業の對應である。ここでは、ジャワ全域に關する糖業統計、住民農業の耕地統計、住民作物統計、水稻統計、灌漑統計などの基礎データが示されるとともに、植民地政廳、糖業、農民の對應が要領よく整理されている。

恐慌による砂糖消費の減少と各國の保護主義の強化は、砂糖滯貨の急增と價格暴落を引き起こし、砂糖輸出國を直擊した。この危機を打開するため、一九三一年に主要砂糖輸出國の糖業代表によって國際的な輸出制限協定であるチャドボーン協定が締結された。ジャワ砂糖生産者連合（VISP）は、一九三二年一二月に蘭印砂糖販

賣組合（NIVAS）に再編され、砂糖輸出を獨占的に管理することになった。さらに一九三七年には砂糖暫定規則によって生産過程を含む全過程が植民地政廳の統制下におかれている。

次に個々の糖業レベルの具體的對應では、二〇年代後半期は世界市場における砂糖價格の下落に生産擴大で應じたが、その後、經營内部での資材購入の節約、賃金引き下げ、勞働者削減を行い、一九三二年以降は栽培の大幅縮小を實施した。

一方、一九三〇年代の住民農業では、土地利用の集約化による對應が特徴的であるが、その他にも糖業の栽培縮小によって水稻栽培面積の擴大が可能となり（中・東部ジャワ）、食糧事情が惡化すると、大豆、トウモロコシ、キャッサバなどの增産（低米價に代わって現金收入の道）を試みている。著者は、恐慌期の農民が少しでも有利な作物への轉換を圖り、現金支出を切りつめて經濟危機を積極的に切り拔けようとしたという。この點は、恐慌期農民の積極的な生活防衛の對應として、後の章でも繰り返し強調される著者の視點である。

最後に植民地政廳の對策として注目されるのが、國際的な米價下落に對する米輸入制限の措置であり、これによって外島での米需要が增大し、精米所經營の安定が圖られた。興味深い論點は、食糧の輸入制限と農産物（主に米）の地域間移出入の動向であり、とりわけ島嶼間貿易の擴大という視點は恐慌期の農産物流通の變化として注目されてよい。

Ⅱ　スラバヤ農村研究

第二章～第四章がスラバヤ農村の分析である。まず第二章では、スラバヤ糖業の恐慌對策と、それに對する土地貸出農民の抵抗の實態が檢討されている。

スラバヤはジャワ最大の糖業地帶であり、一九三〇年には三五の糖業が操業しており（ジャワ全體の糖業數は一四七）、水田の六割～九割を甘蔗栽培に組み込んでいた。外資の糖業生産計畫が、地域農業を全面的に支配・管理する事例である。ここでは、企業毎の詳細な年度別データ（一八六〇年代～一九三〇年代）が示されており、スラバヤ糖業の推移を知ることもできる。當地の甘蔗栽培は、村長を介した村落單位の土地貸與が廣く見られ、共同的占有地の土地割替と三年輪作法の結合が特徴的である。

スラバヤ糖業の恐慌對策は、經費節減（耕作費、肥料代、職員給與、灌漑費など）と栽培縮小であり、後者は契約破棄、栽培延期、農民への再貸付・分益小作などの方法をとり、三〇年代半ばには最盛期の一〇分の一にまで縮小したという。

これに對する土地貸出農民の抵抗は、三二年～三三年にかけて糖業に全面的に依存していた水田地帶で激化した。運動は村落毎に補償額の引き上げや契約借地料の全額支拂い要求が中心で、インドネシア民族同盟（PBI）とその農民組織ルクンタニが村落單位に集會を組織し、村落決定による民事訴訟を戰術とした。糖業に對しては借地契約の遵守を要求、政廳には地稅支拂の猶豫を請願した。村落支配層まで卷き込んで村ぐるみの運動が展開したが、三三年後半期にはルクンタニが彈壓されて、運動は急速に沈靜化している。

こうした農民運動の分析では、村落レベルまで下った事例が紹介されており興味深いが、敢えて難點を言えば、當該期民族運動との關連が不明瞭なことである。當時の民族運動の諸潮流の中における

ＰＢＩの位置、その運動方針と組織原理、傘下の大衆組織とりわけ農民組織の指導方針などの解説があれば、恐慌期の農民の抵抗運動の性格がもっと理解しやすいように思われる。

いずれにしても、糖業に全面的に依存したスラバヤ農村の構造は變化を迫られることになった。糖業からの現金收入の激減によって、住民農業も變化せざるを得ない。

それゆえ第三章は、スラバヤの住民農業の特徴と恐慌による變容が課題となる。ここではまず、三〇年代の主要作物の生産動向を各年、各時季、さらには各月ごとにデータが集計され、詳細な生産動向の檢證が行われている。

それによれば、スラバヤ農業の特徴として、水稻の壓倒的優越（とくに雨期）と米商品化率の高さ、集約度の高い耕地利用、水田裏作での大豆・トウモロコシ栽培とその商品化、糖業地帶（南部三縣）における灌漑の普及、乾季の晝夜給水法（晝間は甘蔗栽培、夜間は住民栽培に給水）による住民乾季作の制約、雨季に糖業への貸出水田を優先する配水（ゴロンガン制度）などの諸點が指摘されている。

恐慌期スラバヤ農業の變化としては、糖業の栽培縮小によって住民農業の利用可能水田が實質的に大幅增加し、住民は返還田の作付け擴大とその集約化（とくに乾地）によって恐慌に對應した。作付け動向では、糖業の伸縮に強く規定されながらも、住民は市場價格の動向をみながら有利な作物を選擇的に栽培したとされる。得られる結論は、市場を睨んだ住民の主體的對應であり、恐慌期においてもスラバヤ農業の商業的性格は變化していないという點である。したがって、恐慌によって住民農業が自給的性格を強めたとする一般的理解は否定されており、これが著者の強調點である。

次の第四章では、糖業の栽培縮小と住民農業の變容によって、當該地方の農民經濟がどう變化したのかが課題である。當該農村では恐慌前の通常時でも、年末から雨季作米收穫までの半年が現金の不足する時期であり、農民負債は常態化していた。農村の公的融資機關（庶民金融銀行、農民銀行、デサ銀行）は低利融資ではあるがその行數や手續き上の制約があり、むしろ一般的には中國人・アラビア人の民間高利貸しからの籾・現金の借入が利用された。一方、高利貸しは借地を利用して土地を支配し地主的經營も展開していた。

恐慌期に入ると、糖業の栽培縮小で農民は自ら地稅納入に迫られた（それまでは糖業が代納）。地稅納入が困難になると、籾の差し押さえによる強制徵收（現物納化）が實施され、公的金融機關の返濟滯納に對しては貸付制限が強化された。農民は農業の集約化と價格動向に對應した作物栽培で對應したが、農產物價格は全體的に低下しており、家計補充的な農外勞働は減少、收入は地稅支拂と高利貸しへの返濟だけでも不足した。このような狀況下で、高利貸しは共同的占有地の水田借入の方法で土地集積を一層進め、その際に村落支配者層の仲介も廣く見られたという。

それでは、恐慌期に村落內の階層構成はどう變化したのであろうか。著者によれば、村落支配層、土地占有農民、非土地占有者の三階層の全般的落層化が結論づけられている（二八〇頁）。しかし、このような著者の分解論には、評者は少なからず疑問を感じる。

まず村落支配層の沒落に關する疑問である。村落支配層については、糖業への土地貸出手數料の減收、地稅手數料の減收、住民の貧困化による雜收入の減少などが指摘されているが、同時に土地借入

によって經營規模を擴大したのが村役人でもあったこと（二六七頁）、村長は高利貸しの代理人として利益をあげていたこと（二七三頁）、相對的に大規模な優等田を所持していたとの指摘もあり、相反する二側面が考えられ、村落首長の沒落傾向は十分に實證されているとは言い難い。

また、土地占有農民について共同的占有の水田を所有する農民（ゴゴル、世帶主の約半數）は「比較的均一な階層」（二七七頁）とされている點も疑問である。評者の理解では、この時期のゴゴル農民の間には土地貸借を通して一定の階層分化が進展していたと考えられる（拙著『インドネシア經濟史研究』ミネルヴァ書房、一九九三年、二三二頁～二三六頁）。著者はゴゴル農民の全般的な沒落を強調されているが、共同的占有の占有權內容の變化に注目しておらず、土地共有に對する共同體規制の弛緩が檢討されていない。土地共有が根強く殘ったとされるスラバヤ地方でも、歷史的にみれば占有權內容が變化（弛緩）しており、それゆえゴゴル農民の間での階層分化にも留意しておかねばならない。

さらに著者の農民分析が、土地占有農民に限定されていることも問題である。著者も指摘されているように、水田占有者は村落內の「相對的富裕層」（二七四頁）なのであり、村落內には住民のおよそ半分を占める非土地占有者が存在していたはずである。ところが本書では、非土地占有者の存在形態について具體的分析はほとんどなく、彼らの沒落の實相は全く分からない。私見によれば、おそらく彼らは土地占有農民に隸屬する身分として、農作業補助や勞役代行、あるいは糖業での賃勞働や樣々な農外雜業に從事して生計をたてていたものと思われる。恐慌で最も大きな打擊を受けたのは、このような下層身分の人々であろうと考えられるから、農村社會の分析には缺かせないはずである。評者の關心から言えば、恐慌期においてジャワ農村に特有の身分階層制がどのように變質したのかも、興味深いテーマである。

以上、スラバヤ農村の分析では、恐慌期の糖業經營と住民農業の對應に關して實態把握の面で多くの貴重な前進がみられるが、結論としての著者の農民層分解論には俄に贊成し難いと言わざるを得ない。

Ⅲ　ブスキ農村研究

ブスキ地方は糖業と煙草のプランテーション地帶であるが、土地占有形態や人口・耕地狀況はスラバヤとは對照的である。

まず第五章では、恐慌期ブスキの糖業が分析されている。

ブスキの糖業はパナルカン縣に集中しており、水田は世襲的個人占有が支配的なので、糖業の借地契約は土地占有者と個別に行われ（二一年半の長期契約）、スラバヤのように村落首長が介入することはない。この地方でも三〇年代初めまでに三年輪作法が一般化しており、その栽培方法が具體例で說明されている。ブスキ糖業で特徵的な點は、地域の勞働力不足が深刻であり、繁忙期には縣外（主にマドゥラ島とサプディ島）からの大量の季節勞働者が調達されていることである。

糖業の恐慌對策としては、經費節減策では給與引き下げ、勞働強化、作業簡素化による勞働者削減などがあり、もうひとつの栽培縮小策では、借地の不使用協定締結、一方的破棄條項を含む新契約への變更、最低借地料基準の改訂などが實施された。

ここでは栽培縮小交渉の實情について、縣毎の詳細な史料引用が示されていて興味深い。栽培縮小交渉に對しては、パナルカン縣やジュンブル縣で住民側の抵抗があったという。焦點は補償額の引き上げ幅であったが、借地料の全額支拂いを要求して補償方式の受入を拒否し、契約變更にも應じない農民もいた。抵抗の中心はPBIなどの支援を受けた大土地所有者＝不在地主であり、村ぐるみで抵抗したスラバヤとは運動形態も異なっている。この不在地主が現地人なのか、スラバヤのように高利貸し活動で土地集積した中國人・アラブ人なのか、恐慌期農村の階層構成の變動を考える上で重視すべき論點であろう。

第六章は、ブスキの輸出向け作物の中心である煙草栽培の分析である。

ブスキの煙草栽培は、企業が住民の水田を借入して雨季に收穫する農園栽培（ジュンブル縣八社、ボンドゥォソ縣一〇社）と、住民が水田または乾地を利用して自營で行う住民栽培とに大別される。農園栽培では、借地のおよそ半分が煙草栽培に利用されるが、栽培期間が半年なので甘蔗栽培のように稻作を犠牲にすることはない。土地貸出者が、農園の指示・管理に從って、貸出水田で煙草を栽培するのが原則である。中心のジュンブル縣では耕地のおよそ三〇％ほどが煙草收穫面積となっている。一方、住民栽培の方は、現地人仲買人を通して買上企業に販賣され、やはり輸出に回される。農民にとっても煙草栽培が重要な現金收入源となっていた。

恐慌期にオランダ市場の煙草價格が暴落すると、農園は栽培縮小、借地契約破棄で對應しており、中には操業停止した農園もあった。住民栽培では買い付け價格を睨みながら生産調整を行い、他作物栽培に切り替えるなど、農民は柔軟に對應したという。農民經濟への影響という點では、借地料が地稅相當額程度であったこと、土地貸出期間が半年で他作物の生産と競合しないことなど、農園への依存度は相對的に小さかったことが強調されている。

ここでも土地貸出農民の煙草栽培や土地占有者の住民煙草栽培は詳細に檢討されているが、マドゥラ島などから大量に流入する出稼ぎ勞働者や村落下層民の勞働力編成についての分析がほとんど行われていない。彼らが煙草栽培とどのように係わったのかは、恐慌による農村の變化を知る上からも缺かせないはずである。

第七章は、ブスキの住民農業の分析である。

ブスキ地方は、一九三〇年代でも耕地化率は三八％に過ぎず、しかも乾地が六割をしめる農業フロンティアである。また牛の飼育と流通が盛んなことでも知られていた。州內農業については、やはり詳細なデータによって縣レベル、郡レベルまで下った地域差の檢討が行われており有益である。

そのデータによると、住民農業はトウモロコシと稻作を中心としている。肥沃な耕地に惠まれ水利條件も良好な當地では、生産性が高く、集約的農業も進展して、農産物の他地域への移出も盛んであった。また、稻作に關連して精米業經營者に中國人やアラビア人が多く、農民の精米所への依存が強かったとの指摘もあり（三八五頁）、注目しておきたい。

恐慌期住民農業の變化としては、灌漑整備の擴張や土地利用の集約化に務めたが、恐慌に對應した急激な變化は見られず、農業の地域的な特徵も大きな變化はなかった。やはり住民は農産物市場の價格動向に敏感であり、有利な作物である大豆やキャッサバを選擇的

に栽培したという。その結果、ブスキ農業の農産物移出地域としての商業的性格はむしろ高まったと結論づけられている。

第八章は、農民經濟の分析であり、ブスキ分析の締め括りの章にあたる。

ブスキの農民經濟は、全面的な農企業依存型ではなく、住民農業（米、トウモロコシ、煙草、コーヒー、ゴムなどの栽培）からの收入が豐かであると言われるが、著者の史料分析によれば、端境期にデサ銀行・庶民金融銀行や高利貸しからの借入も恒常的に見られる。恐慌によって農民經濟が後退した三〇年代前半期、公的金融機關の引き締め策は高利貸し活動を活潑化させた。

高利貸しの大半は中國人とアラビア人であり、精米所や買付商の活動を通じて農民に前貸し融資を行っていた（四四五頁）。一方、この地方の特徴として著者が強調されているのは、村落内の現地人有力者が高利貸し活動を行い、貸付を通して支配關係が形成されていたことである。ただし、評者のみるところでは、現地人高利貸しが高利貸しの多數を占めることが實證されているわけではない。

土地が個人占有である當地では、恐慌期以前から村落を越えた土地の質地・賣買が廣範に行われ、大土地占有者による不在地主制が展開していた。水田非占有世帯が過半に達していることも、當該農村の特徴である。

恐慌期の大土地占有者は、小作希望者が多かったこと、農企業の栽培縮小でも從前の借地料を得ていたこと、農産物を高騰期に販賣できたなどの要因から、恐慌による大きな打撃は受けず、むしろ高利貸し活動を通じて土地集積を進展させたとみられる。一方、中下層農は恐慌期に負債が累積し、水田やヤシ園の質入れから始まって、やがてはこれが占有權の移動を伴う賣買へと發展し、土地なし農へと轉落したものも多いという。

以上のような事實から著者は、エルソンの言うような恐慌期の大土地占有者の沒落と中農平準化説を批判し、農民層の地主・小作分解と地主層の不在地主化が強調されている。しかし、このようなエルソン批判は、必ずしも妥當なものとは思われない。エルソンの事例分析はパスルアン農村であり、分析對象地域が異なっており適切な批判とは言い難いのである。むしろ評者に理解出來ないのは、ブスキでは現地人の不在地主化が強調されている點である。前述のように、精米業や買付商として農民に前貸し融資を行う中國人商人やアラビア人商人が登場するのに、何故彼らがスラバヤのように不在地主化しないのか。逆に言えば、何故現地人の大土地占有者のみが不在地主化するのか、説明が十分ではないように思われる。

なお終章では、以上の論點を再整理した上で、今後の課題も提示されている。著者によれば、恐慌期ジャワ農村の變化をトータルに捉えるには、同じジャワ農村でも世界市場との結び付き方が異なる他地域の檢討、農村の社會經濟變化と關連する農外産業の檢討などが重要とされ、またインドネシア植民地經濟の構造變化という觀點からは、貿易構造の變化、ジャワと外島の經濟關係、當該期の輸入代替工業化の進展如何といった點も指摘されている。

おわりに

本書は、繰り返し指摘してきたように、未刊行史料を驅使した極めて實證度の高い勞作である。膨大な史料の渉獵とその讀破に多大な努力を傾注されたであろうことは、同じ分野を專攻するものとし

て容易に推察される。何よりも本書の貢獻は、恐慌期におけるプランテーション經營の動向と、その商品作物生產に組み込まれた住民農業の實態が、二つの地方を事例として詳細に實證されていることであろう。それゆえ、本書が後續の研究者にとって資料的價値の高いものであることを強調しておきたい。以上を前提とした上で、いまひとつジャワ農村社會像に係わる論點を提示しておきたい。それは、ジャワ農村史研究の重要な論爭點であり、本書を通讀しても評者には論理整合的に說明されているとは思えなかった問題である。

周知のように、ギアツ的農民像＝「貧困の共有」論に對しては、合理的經濟人としての農民像が示され（例えば、J. Alexander and P. Alexander の所說）、ジャワ農民の行動樣式をどう見るかという重要な論爭點が提起されて久しい。著者は、恐慌期の農民の對應について、市場價格を睨んだ有利な作物への切り換えなど、農民の能動的・積極的な對應を評價しておられる。恐慌期においても、住民農業の商業的性格に變化はなかったと言われており、いわば合理的經濟人としての農民像が提起されているわけである。一方、農民の階層變動については、農民層分解論の視點からギアツ的な「貧困の共有」論が否定されている。ところが、スラバヤの事例分析をみると、糖業の栽培縮小に對して住民は村落ぐるみの運動で抵抗しており、村落的結合原理が依然として根強いことが強調されている。個々人の經濟的利害と村落への結集原理とはそれほどうまく共存するものであろうか。

この點と關連して、村落共同體の組織原理の變質如何が重要な課題であるように思われる。既述のようにスラバヤ農村に關しては、土地共有に對する共同體規制の弛緩度、共同的占有農民の分解如何が本書では等閑視されており、身分階層制の變化も不明である。ブスキ農村では、個人的占有に基づく土地商品化が進展して、農民層の分解も明瞭であるが、それでも村落が共同體としての機能を失っているわけではない。いずれにしても共同體成員の相互扶助的農村慣行（土地共有、水平的土地貸借、勞働交換、勞働と結びついた共食儀禮など）は恐慌期に變質したのであろうか。これは、當該期農民の行動樣式を捉えるためにも重要な視點であろう。

著者は、「近現代ジャワの農村社會經濟の構造變化を一貫して把握するためにも、三〇年代の研究は極めて重要」（あとがき、四九五頁）と考えておられる。比較的研究豐富な一九世紀農村研究や戰後の「綠の革命」期農村研究とつなげて一貫した歷史像を提起することの重要性は、著者の言われるとおりである。そのためにこそ今後は、村落共同體の組織原理、下層農民を含めた身分階層制と勞働力編成、當該期農民の行動樣式の特徵などが、前後の時代との連續・變化・斷絕の諸側面から系統的に檢討される必要があるように思われる。

一九九七年二月　東京　勁草書房
A5　五三五頁　一四〇〇〇圓